

おしえて
お墓の話

石造美術オタクの

ひとり言

⑦比都佐神社宝篋印塔



高橋晋也／庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材企画室の高橋です。大変ご無沙汰しております。連載といえながら不定期連載となつてしまいい大変申し訳ございません。前回までは、一般的な石塔の仏塔思想や私なりの想いをお話（ひとり言）させて頂きました。今回からは日本各地の石造物の紹介や、その石造物に対しての石屋目線、いや、石造美術オタク目線で私の想いなどをお話（ひとり言）させて頂きたいと思ひます。

こんにちは、(有)翼石材・企画室の高橋です。大変ご無沙汰しております。連載といえながら不定期連載となつてしまいい大変申し訳ございません。前回までは、一般的な石塔の仏塔思想や私なりの想いをお話（ひとり言）させて頂きました。今回からは日本各地の石造物の紹介や、その石造物に対しての石屋目線、いや、石造美術オタク目線で私の想いなどをお話（ひとり言）させて頂きたいと思ひます。

最初に紹介する記念すべき石造物は、どれにしようか迷ったのですが、鎌倉時代後期・嘉元二年（1304年）造立の滋賀県蒲生郡日野町にある『比都佐神社宝篋印塔』（国重要文化財）にしました。なぜ、この塔かという、答えは一つ、「すばらしい！」その一言に尽きます。

一つです。

では、簡単に塔の紹介をしていきたいと思います。塔は花崗岩製（地元蔵王の米石）・現高175cm、比都佐神社本殿の左手の基壇上に建っていますが、基壇はほぼ埋没しています。基礎は、各面に輪郭を巻き、格狭間を配しています。内二面に対向孔雀、一面に開花蓮、もう一面には銘文が刻まれています。

塔身は各面蓮華座上の月輪を線刻し、胎藏界の種子を薬研彫りしています。笠は下端二段、上の段形は珍しい七段です。隅飾は三孤輪郭巻きとし、内部は素面です。相輪は残念ながら欠失し、代わりに小型宝篋印塔基礎と、その上に五輪塔の空風輪を乗せています。

と、石造物関係の書籍や辞典などに載っているような説明ですが、専門用語ばかりになっていま

すので、改めてもう一度わかりやすく説明したいと思ひます。



比都佐神社宝篋印塔の全景

各部位のポイントを わかりやすく解説

まず、写真を見て下さい。基壇というのは写真の下の方に、地面から少しだけ飛び出している石のことです。そもそも基壇の用途は塔を荘厳（おごそかに飾ること）するためのものです。現在でいえば四ツ石とか芝台に相当するのではないのでしょうか。

次に基礎とは基壇の上に乗る上端に二段の段形があるものです。各面の

輪郭巻きとは側面の周囲を囲っている枠のことです。そして格狭間とは石造物以外にも須弥壇や露盤、棧唐戸など広範囲に使用されており、形状は上部が曲線の集合、下部が椀のような装飾文様です。

形状の由来はまだまだ定説はないといわれていますが、台の脚から進化したものともいわれています。この格狭間内に対向孔雀や開花蓮が陽刻されており、近江を中心とした分布状況から近江式装飾文様と称されています。これらの文様も、やはり塔を荘厳するためのものです。

そして塔身とは基礎の上に乗る四角形の部材のことです。この石塔の最も大事な部分です。この塔の種子は、東方宝童如来・南方開敷華王如来・西方無量寿如来・北方天鼓雷音如来の胎藏界の四方仏です。塔身の中

心は大日如来となり、胎藏界五仏を顕していることになり



基礎の格狭間内に刻まれた開花蓮と対向孔雀文様

つまり、先述の「最も大事な部分」というのは、塔身に胎藏界五仏を安置しているからです。蓮華座とは仏像の台座であり、石塔では四

方仏が乗っているように表現されている文様のことで、月輪は円形の輪郭のことで、内に種子や仏像が彫刻されます。最後に笠ですが、隅飾とは笠の四隅の突起物です。三孤とは、その突起物の内側が二段や三段の曲線になっていることをいい、この塔は三段の曲線になっているので三孤という表現です。輪郭巻きは、先ほど基礎のところで説明させていただいた通りです。

内部素面とは、塔によつて側面の輪郭内に種子を彫刻する場合がありますが、この塔は輪郭内に何も彫刻されていませんので、素面という表現をしています。それと上の段形は珍しい七段とありますが、よく見られるのは六段です。小型塔には四段や五段のものもあります。

ただ、宝篋印塔の祖型といわれている、中国の呉越国王・銭弘俶が造塔した銅製の小塔「銭弘俶八万四千塔」には、これら段形がありませんので、いわゆる地方色なのでしようか。ちなみに石造物は木造建築や舍利容器などから派生したものですから、それらをたどっていけば段形の教義がわかるかもしれません。



塔身には蓮華座上の月輪を線刻

比都佐神社宝篋印塔 ならではの魅力とは

いかがでしたでしょうか？ここまでは、単純に塔形の説明でしたので、ここからは比都佐神社宝篋印塔の魅力をお伝えしようと思ひます。

魅力の一つ目は、大きさです。滋賀県では屈指の規模を誇り、基礎幅は約93cmあります。現在相輪を欠失していますが、揃っていたら九尺塔にもなりますので、そのころの雄姿を見たかったと足を運ぶたびに思っています。それはそれとして、十分見応え抜群です。

二つ目の魅力は、パランスがスツキリとした塔で、さらに手法も極めてすばらしく、石材店にとつては非常に参考になる塔です。冒頭で



笠も見事な出来映えとなっている

も述べましたが、特に対向孔雀文様はたまりません。ただ、この石塔の近江式装飾文様の配置について、ちょっと理解しがたいことがあります。それは東南二面に孔雀、北面に開花蓮、西面には銘文が刻まれています。仮に正面が孔雀とすると向かって左側が孔雀、右側が開花蓮となります。もし私が作るのでしたら左右対称（例・正面孔雀の左右開花蓮、正面開花蓮の左右孔雀）、もしくは3面とも同じ意匠にします。もちろん当時の背景もあるとは思いますが、現代人の私は絶対にはやらない配置です。

石造物を調査していると、今回の文様に限らず、時々このように理解しがたいことがあります。当時の人々と現代人の私たちが何となく感性が違うのでしょうか。でも、そこも、おもしろいというか、石造美術の魅力の一つかもしれません。

三つ目の魅力は笠です。めちやくちや丁寧な作り込みがあります。私は笠の出来映えの判断基準の一つとして、段形と隅飾が合わさるところの完成度も対象にしています（この判断基準、何の根拠もありませんが）。

そして、この塔の最大の見せ場、注目すべきところは、笠の軒裏に雨水の水切りがあるということです。これには私もびっくりというか、感動しました。お洒落な加工です。私が知る限り、笠の水切り加工は、全国で2例です（まだあるかも？）。では、なぜ水切りが必要だったのか？実は銘文によつて塔中に供養品が納入されていることが分かっています。つまり普通に考えれば、塔身上端に奉籠孔（供養品を納めるための孔）があり、その奉籠孔に軒から伝わる雨水の浸入を防ぐため、軒裏に水切り加工をしたものと思われ（奉籠孔の有無は未確認）。

また、他の銘文には、願主らによつて亡き父の十三回忌に造塔されたことも記されています。「この宝篋印塔は見たことがある！」と思った方でも、意外と水切り加工は見逃しているかもしれません。



笠の軒裏には雨水の水切り加工が施されている

以上、比都佐神社宝篋印塔は、どこを取っても大変すばらしい塔です。何十回と足を運んでいますが、全く見飽きませんし、いつ見てもほれぼれします。信仰の教義を示す造形美、作り手の創造的エネルギー、そして時代が創り出す石肌が相まって何とも言えません。ぜひ石材人として、一度は（一度と言わず二度、三度）足を運んでみてくだい。

いかがでしたか？何となく雰囲気は伝わりましたでしょうか？こんな感じで今後も進めていきたいと思ひます。本日は石造美術を鑑賞するにあたって私なりのちよつと話をマナーやモラルも話したかったのですが、また、次回にします。

今、ちよつと掲載する写真を選んでいところ、美しい塔の写真を、見つけながら間違いなく、言えることは、「今日の晩酌は格別においしい」ということです！